

広告の鬼神となれ —吉田秀雄の電通鬼十則—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

電通の新入社員の高橋まつりさんが昨年12月25日、女子寮の4階から投身自殺した。労働基準監督署は今年9月30日に過剰な残業による労災と認定し、同社で後を絶たない過労死の実態があらためてクローズアップされた。厚生労働省は11月7日、違法な長時間労働が全社的に蔓延している容疑で東京本社と関西など3支社の強制捜査に入るといった異様な事態となっている。

高橋さんの遺族側弁護士は事件を誘発した要因として第4代社長の吉田秀雄(1903-1963)が遺した電通鬼十則を問題視している。社員手帳にも掲げられた鬼十則は仕事に「取り組んだら放すな、殺されても放すな」といった行動規範が示され、全社のバイブルといっても過言ではない。

広告の鬼と畏怖された吉田は電通の中興の祖であり、広告業界の近代化の最大の立役者だった。だが並外れた成功には少なからぬリスクが付きものだ。鬼十則をめぐる栄光と悲惨は仕事とは何かという普遍的な命題を突きつけている。

広め屋と蔑まれても

吉田は福岡県小倉市、現在の北九州市で両親と兄と妹2人の渡辺家の次男として生まれた。11歳のとき台湾で埠頭工事に携わっていた父が事故死し、新聞配達をして家計を支える。

旧制小倉中学に入学し、いったん横井家の養子となったものの実子が生まれて縁組を解消。翌年、

吉田家の養子となり、鹿児島市の第七高等学校から東京帝国大学経済学部へ進学した。

1928年、大学を卒業して電通の前身である日本電報通信社に入社。営業局地方部内務課に配属され、地方新聞の広告を担当する。

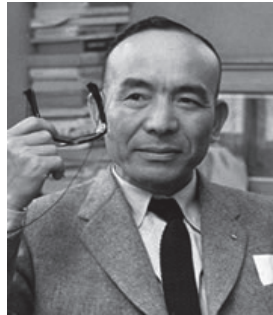
当時、広告代理業は「広め屋」と蔑まれ、広告料金は不定で手数料も叩かれ放題だった。のちに吉田は社内の座談会で「広告取引というものが本当のビジネスになっていない。ゆすり、たかり、はったり、泣き落としだ。まともな人間や地道な者にはやれなかった仕事なんだ」と回想している。

広告取引を近代的なシステムに変えようと入社2年目から有志を募って勉強会を始めた。欧米の先進的な広告業界に学んで「広告は科学である」と口癖のように唱えてまわった。

1936年、同社は通信部門と分離して広告専業となる。吉田は1941年、営業局地方部長に昇格し、翌年12月に常務取締役役に抜擢された。

戦時下の1943年、新聞統制令が施行されると吉田はきわめて曖昧だった新聞広告料金の公正化へ基準づくりを主導する。終戦直後、大手新聞社に乗り込んで15%の手数料を認めさせた。

1947年、名記者といわれた上田碩三第3代社長



吉田秀雄

がGHQ(連合国軍最高司令官総司令部)による公職追放令で辞任に追い込まれ、後任として吉田が44歳の若さで新社長に就任する。

執念の民間ラジオ放送

戦後の広告の主体が新聞から放送へと移行することを見通し、吉田は民間ラジオ放送局の開設に精魂を傾けた。民間放送・コマーシャル放送に関する最新の情報を全国の地方紙に提供し、各支社にラジオ広告研究会を組織してコマーシャル放送のテスト版を大手広告主にアピールした。

1951年、吉田は粘り強い交渉によって朝日、読売、毎日の各新聞社と東京放送の一本化に成功。株式会社ラジオ東京として免許を申請し、同年のクリスマス・イブに晴れて放送を開始する。

開局にあたって吉田は社員をホールに集めて「これから始まる民間放送の仕事は大事業である。命がけの仕事である。諸君のうち半数は死ぬであろう。しかし命をかけても価値のある仕事である。願わくば生き残って民間放送の先駆者となりたまえ」と凄まじい気遣いで檄を飛ばした。

全国で開局が本格化すると免許申請手続きから番組編成、番組制作、営業方法に至るまで各地方新聞社を全面的に支援。ときには出資協力したり、地方局のスタッフとして社員を送り込んだ。

1955年、創業55周年に際して株式会社電通に社名を変更する。吉田は「世間的な才能努力では世間並みの収穫しかない。電通とはそのようなものではないはずだ。石に齧りついてでも所信を貫き、他の誰にも負けない広告の鬼神であるはずだ」と新生電通の圧倒的な躍進へ全社を奮い立たせた。

1958年、東京でアジア国際広告会議を開催し、同年アメリカのフォーチュン誌が「広告の大鬼」という見出しで吉田の業績を紹介する。1961年に国際広告協会(IAA)からアジア初のマン・オブ・ザ・イヤーに選ばれ、翌年には東芝や民放18社と出資してビデオ・リサーチを設立し、テレビの視聴率調査装置を完成させた。

業界の頂点を極めた吉田は2年後、みずからの使命を果たしきったように胃癌で59歳の生き急いだ生涯を終える。

命より大切な仕事は

電通鬼十則は1952年、前年の「広告の鬼になれ」という訓示に基づいて打ち出された。内容は①仕事は自ら創るべきで、与えられるべきではない②仕事とは先手先手と働き掛けていくことで、受け身でやるものではない③大きな仕事と取り組み、小さな仕事は己れを小さくする④難しい仕事を狙え、そしてこれを成し遂げるところに進歩がある⑤取り組んだら放すな、殺されても放すな、目的完遂までは…⑥周囲を引きずり回せ、引きずるのと引きずられるのとでは、永い間に天地の開きができる⑦計画を持って、長期の計画を持っているならば、忍耐と工夫と、そして正しい努力と希望が生まれる⑧自信を持って、自信がないから君の仕事には、迫力も粘りも、そして厚みすらない⑨頭は常に全回転、八方に気を配って、一分の隙もあってはならぬ、サービスとはそのようなものだ⑩摩擦を怖れるな、摩擦は進歩の母、積極の肥料だ、でない君は卑屈未練になる——というものだ。

全編を貫く激烈な精神論は創業者の光永星郎の軍人的な気風を受け継いでいる。日清戦争の従軍記者から通信・広告代理業に転身した光永は熱血を象徴する赤い名刺を差し出すような熱烈な精神主義者だった。夏の恒例行事である新入社員らの富士登山も光永の発案で始まった。

創業の精神を引き継いだ吉田は文字どおり仕事を戦争と見做していたのかもしれない。戦争なら犠牲者が出て当然だ。だが仮に戦争であったとしても攻めるときもあれば守るときもある。大局的な見地から犠牲者をできる限り出さないようにするのが指揮官の役割だ。吉田は指揮官の発する号令の威力に余りにも無自覚だった。

後世への遺訓となった鬼十則はいわばアクセルだけ装備してブレーキを付けた欠陥車だ。アクセルをふかせばふかすほど際限なく暴走していく。

理想論でいうと仕事とは命を擦り減らすものではなく命を輝かせるものだろう。みずから命を断った高橋さんの母親が語ったように命より大切な仕事はない。